

コンテンツ収集戦略

学術ポータル担当者研修

平成21年8月5日(名古屋)

平成21年9月9日(東京)

京都大学 筑木一郎

小樽商科大学 鈴木雅子

目次

- 機関リポジトリのコンテンツとは
- 各コンテンツの考えどころ
- コンテンツ収集：教員への広報
- さいごに

そもそも、機関リポジトリとは

- 大学がその構成員に提供する、**大学**や**その構成員**により作成されたデジタル資料を管理し発信するための一連のサービス(リンチ)

学内構成員に提供するサービス！

機関リポジトリのコンテンツとは

- **所属研究者の研究成果と機関の活動成果**
 - 学術雑誌掲載論文、学会発表資料、記事、コラム、サイエンスデータ、ビデオ、音声、教材、紀要、学位論文
- コンテンツは増え続けるもの！
- 所蔵資料の電子化ではない
- メタデータだけのDB構築ではない

コンテンツの2タイプ

	個別モノ	一括モノ
代表的なコンテンツの例	学術雑誌論文、 学会発表資料、...	研究紀要、学位論文、 科研報告書、...
性格	所属研究者の研究成果	機関としての活動成果
出自	外で刊行	大学が刊行
対象物	そもそも把握しづらい	把握しやすい
アタック先	個々の教員	編集委、教授会など
収集範囲	教員の手元にしかない。過去のものはあまり残っていないので、目標をカレント分に絞らざるを得ない	初号から最新分まで組織的に。バックナンバーは刊行元か、あるいは書庫所蔵分のスキャンも。あとはアイデア次第
コストと効率	主として人的コスト。 がんばってがんばってがんばって やっと少しずつ集まる	主としてスキャン経費。 電子化の主体的意志をうまく喚起してIR 事業と接続し、作業ベースに落とす
IRの持続性への意義	教員ひとりひとりのIRへの理解と支持は事業継続の土台	いったん開拓できれば安定的なコンテンツ流入ルートに
いずれも	コンテンツの持ち主との対話、プロモーションがすべて	

一括モノ：紀要類

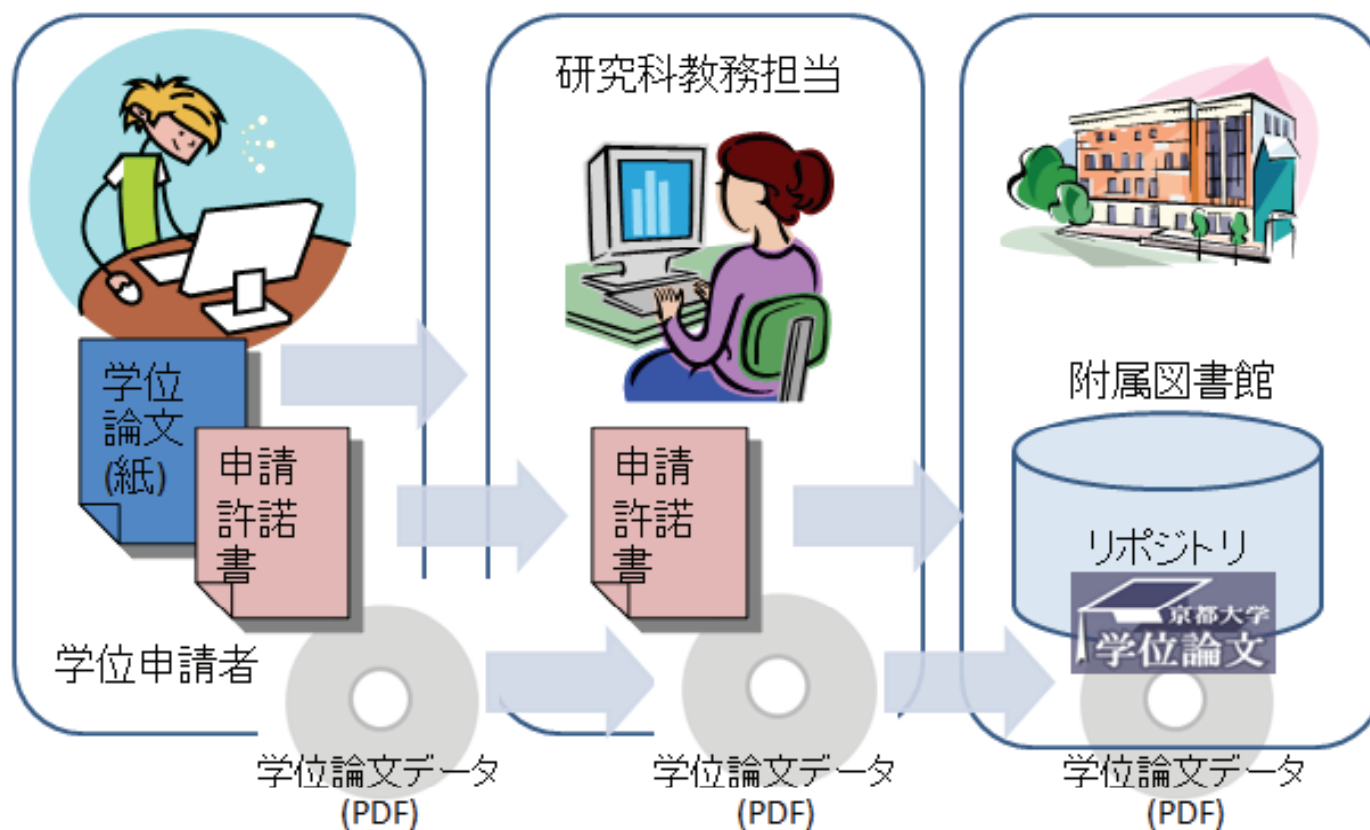
- 主な調整先：紀要編集委員会
 - 電子公開の主体は紀要発行母体、図書館は場所貸し
(「図書館に持ってかれる」印象を与えないこと！)
- 新刊分：**ボーンデジタルで！**
 - 編集・査読プロセスそのものを電子化
 - 印刷業者からPDF納品
 - (改めて紙からスキャンすることがないよう)
- バックナンバー
 - 権利処理(事例)
 - 投稿規程を過去に遡って適用
 - HPや紀要、メール等でお知らせ
 - 著者ひとりひとりに許諾
 - スキャン(事例)
 - H大 スキャンのみ5円弱/p(3万ページ), メタデータ100円/件
 - O大 スキャンOCRつき 15円/p(1万5千ページ)

一括モノ：学位論文

- 主な調整先：教務、学位審査委員会
 - 抜刷で学位申請するケース
 - 特許取得、出版予定との関係
 - 博論、修論、卒論／誰の／どこでとった？
- 新規授与分
 - 義務化？
 - 事例：提出書類に許諾書を入れる
- 過去の授与分
 - 解体再製本費用
- Cf. NDLによる学位論文電子化構想

学位論文公開の仕組みづくり(京大の例)

学位論文のリポジトリ登録の流れ



一括モノ: 科研報告書

- 平成19年度報告以前
 - 紙媒体による報告書(いわゆる科研報告書)
 - 多くの場合、成果論文の抜刷(=出版社版)の塊
 - 実績報告書(年度ごと)、成果概要(最終年次)
 - NIIのKAKENデータベースに収録・公開
 - 成果論文
- 平成20年度報告以降
 - 報告書(4~5枚相当の電子報告)
 - NIIのKAKENデータベースに収録・公開
 - 成果論文

参考：大学出版会出版物

- 主な調整先：大学出版会
 - 外部組織である出版会とお話をする機会に
 - コラボレーションの事例（京都大学）
 - コンテンツは出版会側がチョイス
 - 「新しい学術コミュニケーションを開き，研究のすそ野を広げ，研究成果の結晶としての本の意味が見直されることで『研究書離れ』を克服したい」(京大出版会)

個別モノ

- セルフアーカイブ＝OAは著者の権利
 - 教員が登録するか、図書館員が代行するか
- 収集方針・運用方針
 - 公表済文献に限るか
 - 前任地で執筆した文献も対象とするか
- 共著者の意向、出版社のポリシー
- 待っているだけではコンテンツは集まらない
 - 広報
 - **まず1件入れてもらう**(そうすればわかる)
 - ピンポイントな要求 → この論文を！
 - マンツーマンな対話
 - 説明しつくすことを目指さない

先行事例

- ノッティンガム大学、エディンバラ大学
 - 参考文献: e-プリント機関アーカイブのセットアップ(2002.3)
- グラスゴー大学
 - 参考文献: 機関リポジトリをコンテンツで満たす(2003.10)
- ロチェスター大学
 - 参考文献: より多くのコンテンツを機関リポジトリに集めるために教員を理解する(2005.1)
- ホワイトローズ連合
- クランフィールド大学
- 北海道大学
 - 参考文献: 0から1000へ. HUSCAP プロジェクト(2006.10)

<http://www.nii.ac.jp/irp/archive/translation>

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?reference>

ノッティンガム大学、エディンバラ大学 (英国)

- 原則的には、「百聞は一見に如かず」。デモンストレーションバージョンを見せる
- 教員は「雑誌危機」それ自体にはまったく興味がない
- 長期的な経費削減の点はあまり強く主張するべきではない
- 物理学以外の学問分野の研究者は、プレプリントを公開するという考えをひどく嫌う
 - e-プリント機関アーカイブのセットアップ (ARIADNE, 31, 2002.3)

グラスゴー大学(英国)

- 様々な委員会でプレゼンテーションをして、おおむね勇気付けられる反応。しかし実際にリポジトリにコンテンツがデポジットされるかどうかは別
- イベントは教員との対話のきっかけを得るうえでは役立つが、コンテンツの増加にはつながらない
- OA運動に共感すると予想される教員の支持を集める方法として、教員個人のウェブページの調査
 - 機関リポジトリをコンテンツで満たす (ARIADNE, 37, 2003.10)

ロチェスター大学(米国)

- 「それを作れば、彼らはやってくる」というせりふは今のところIRには当てはまらない
- 教員にとってのIRの最大の価値は、IRに投稿した研究成果を他の人々が発見・利用して引用すること
- 「機関リポジトリ」という言葉は、必ずしも個人のニーズや目標ではなく、機関のニーズや目標を支援・達成するために設計されたシステムであることを暗示してしまう
- インタビューから得た言葉を使ってIRを説明する
 - より多くのコンテンツを機関リポジトリに集めるために教員を理解する(D-Lib Magazine, 11(1), 2005.1)

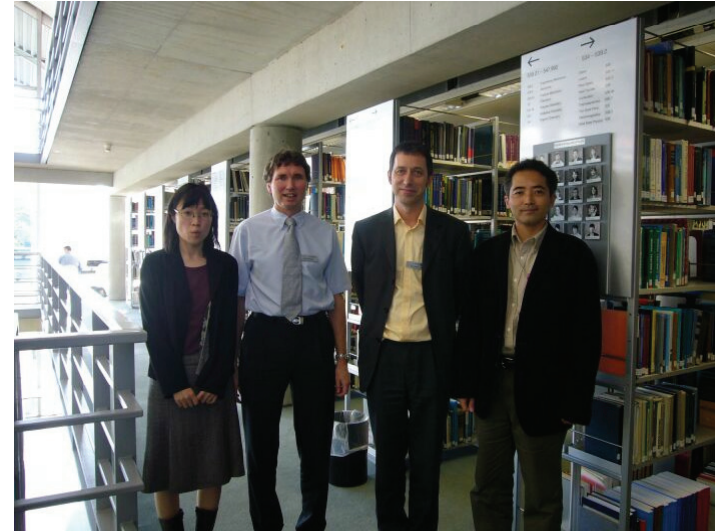
ホワイトローズ連合（英国）

- リーズ大学、シェフィールド大学、ヨーク大学
- 専属のスタッフ（コンセプトメイキングから広報、コンテンツ収集・著作権処理の実務まで）
- 強い推奨（strong encouragement）をしている。強制（mandate）に進むつもりはない。（非常に好意的な研究者であっても義務として強制されるのを好まない）
- トップダウンだけでは進まない。ボトムアップは不可欠
- 3大学のコンテンツ数のバランスに気を使っている



クランフィールド大学(英国)

- 図書館全体で業務の一部として運用している。
このことと、強力な協力者がいることが成功の鍵
- コンテンツ収集の4つの課題
 - 研究者は忙しい
 - 出版バージョンと異なる版の流布を嫌う
 - 全ての文献を搭載できないので、あたかも「自分の業績がこれだけしかない」ように見えてしまう
 - 部門Webサイトのように研究内容や研究者情報を満載できない



北海道大学

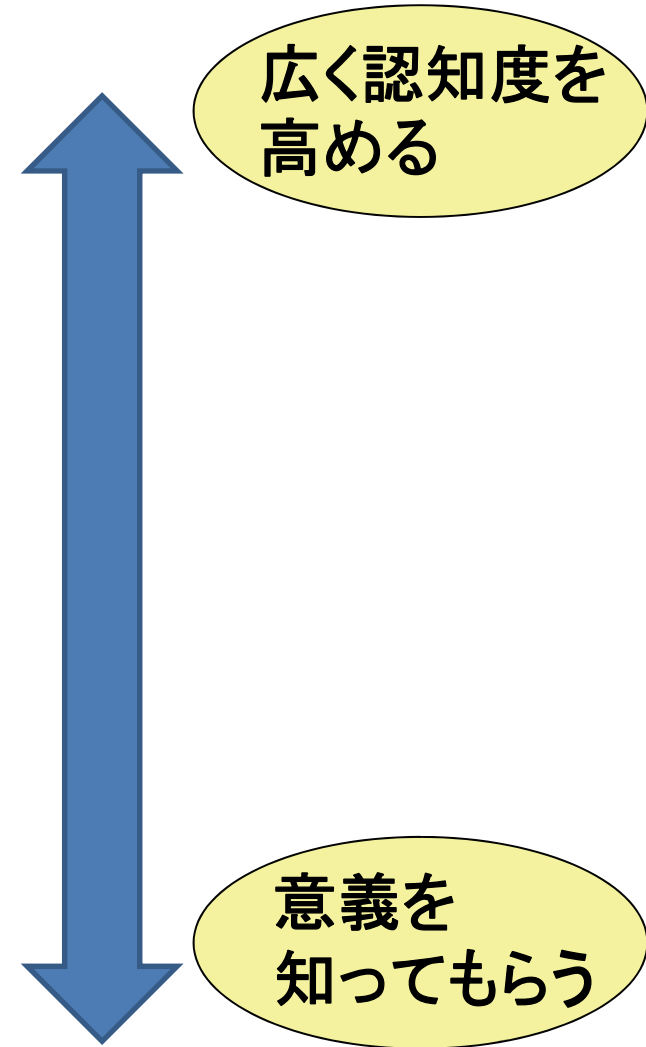
- 個々の文献の可視性向上が最大の目標
 - 総体としての数の充実を求めない
 - 遡及電子化(スキャン)に依存しない
 - ゼロからのコレクション構築
- 個別営業による方針策定(営業＝説得でなくヒアリング)
- Web of Science定期調査による文献提供の勧誘
- 3層の広報活動
 - 名前を売る: チラシ・ポスター(物量作戦)
 - どうしてほしいかだけ伝える: 説明会
 - 効果を実感してもらう: ダウンロード数通知
- From Nought to a Thousand: the HUSCAP Project (ARIADNE, 49, 2006.10)

この論文を！

- 文献情報DB(WOK、SCOPUS)から
- 研究業績から
- サイエンスカフェ、市民講座、講演会資料
- ニューズな論文(iPS細胞)
- たまたま見かけた論文
- ILLで受付けた文献 **cf. ILLを介した連携プレー**
- 出版社版IR掲載OKの文献
 - AIP,APS,IEEE
 - ELS上の学会誌
(http://www.nii.ac.jp/nels_soc/archive/list/)

教員への広報＝研究者とのかかわり

- 愛称、キャラクタ、グッズ
- ちらし、ポスター
- 説明会
- 説明会の質疑応答
- 切り番インタビュー
- 個別コンタクト
- 統計情報のメール通知



百聞は一見に如かず

- 早く公開して、見せて伝える！
 - 「デモンストレーション用のデータベースを構築する際に重要なことは、「本物の」コンテンツを使うことである。」(エジンバラ大学、ノッティンガム大学)
 - 雑誌掲載論文30件で試行公開スタート(北海道大学)
- 初期コンテンツの選定：
 - まずは、学内コンテンツで「見える」ようにするか
 - 「紀要を電子ジャーナル化する話か、僕には関係ないや」
 - それとも、1人1人にアタックすることを選ぶか
 - 「えー、ひとりひとりが文献を出すのか、めんどくさいな」

名前・愛称

学内の先生に認知してもらうことが重要！

- 名前
 - リポジトリ (CURATORほか多数)
 - コレクション (HUSCAP、Barrel、TeaPot、MIUSE等)
 - アーカイブ (室蘭工大、YUNOCA)
 - システム (SUCRA)
- 愛称
 - なし
 - 語呂あわせ (HUSCAP、CURATORほか多数)
 - Barrel、TeaPot、KURENAI

キャラクター・広報グッズ

- キャラクタ
- 広報グッズ
 - クリアファイル
 - バッグ
 - うちわ
 - 食堂三角スタンド
 - タンブラー
 - 缶バッチ
 - 鉛筆、ボールペン
 - 付箋
 - 壁紙、バナー



説明会

工夫が必要！（ただ開くだけでは参加者僅か）

- 教授会などにお邪魔する
 - 短く！15分もらったら5分説明10分質疑応答
- 集まりそうなものの一部を充てる
 - 情報リテラシーのついで。WOS講習会
 - 著作権研修会を企画

うまくいけば、効率よく広報できる

（ちらしはスパム、個別コンタクトは時間がかかる）

質疑応答が
いちばん大事

個別コンタクト

- 説得しに行くわけではなく、話を聞きに行く
 - 研究について、投稿雑誌について、OAについて、図書館について → 図書館活動全体にとって有益
- きっかけは何でも
 - 質問が来たら、会いに行く
 - 「ご意見について、もう少し詳しく助言をいただきたい」
 - ファイルが送れない「USBメモリ持って今から伺います」
 - 図書館でこんなことを考えている、アドバイスほしい
 - 先生が読んでいる雑誌や投稿する雑誌について教えてほしい
 - ILLで、カウンターで、コピー機で、道端で(研究室を訪問しなくても)

個別コンタクトの企画

- 誰から？
 - トップから
 - (事例) 学位授与式のあいさつで話題に
 - 身近な先生から。先生の輪
 - 全員！(帯広畜産大学)
- いつ行くか？
 - 構築前
 - (事例) 運用方式、構築の参考に
 - 構築後

個別コンタクト・質疑応答の準備

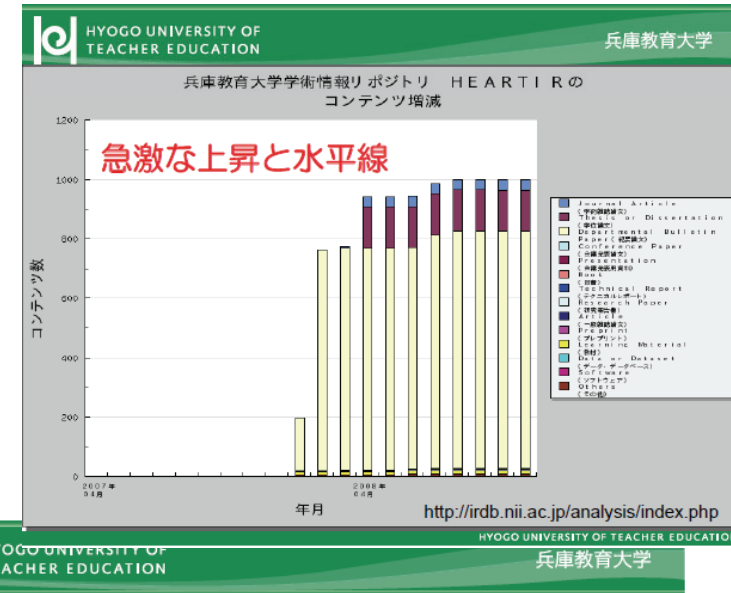
- 予備知識
 - 相手のこと。発表論文等
 - 相手の研究分野の主な出版社ポリシー
 - 雑誌危機（購入雑誌タイトル、EJ予算）
 - インパクトファクター
 - 海外の情勢（NIH、英米議会、ハーバード大学、義務化）
 - 日本の状況（日本のIR数、先行大学のやり方）
- こわがらずに誠実に熱意を持って

ハーバード大学(米国)

- 文理学部(平成20年2月)、法学部(平成20年5月)で、オープンアクセス方針を全会一致で採決
- 学部が大学執行部に、著作権を分け与える
 - 非排他的
 - 所属研究者は特定の論文について、適用を免除させることができる
- 大学は所属研究者の著作をオープン・アクセスリポジトリで公開(現在のところ未構築)

「食堂で鶏を捕まえる」

- 兵庫教育大学事例
- 卵ではなく**鶏**を捕まえる
 - 最大のステークホルダーは教員
 - リポジトリ事業は教員と図書館との新たな関係づくり
- 食堂はアポが不要



「我々が目指すべきは、IRを凍結させないこと、つまり**わずかずつでもよいから**コンテンツが増え続ける「**活きたIR**」である。」

by 阿蘇品さん

凍結...



インタビュー

- 切り番インタビュー
 - クランフィールド大、北大、樽大、京大、筑大、神大...
 - 該当論文の内容、現在の研究内容、研究のきっかけ、IRについて等についてインタビューし公開。
 - 研究者と協力して大学を広報していることに
- 機関リポジトリアドバイザー
 - 広島大学
 - 各研究分野の研究方法や情報入手・成果発表方法・査読システム・研究データの扱い等についてインタビュー
 - ウェブサイトの構成等について意見反映

意見の反映、なるべく早い対応

- 「できません」ではなく、できるだけ対応
- 譲れない部分、難しい部分は代替案、相談
(例)

– 北大HUSCAP

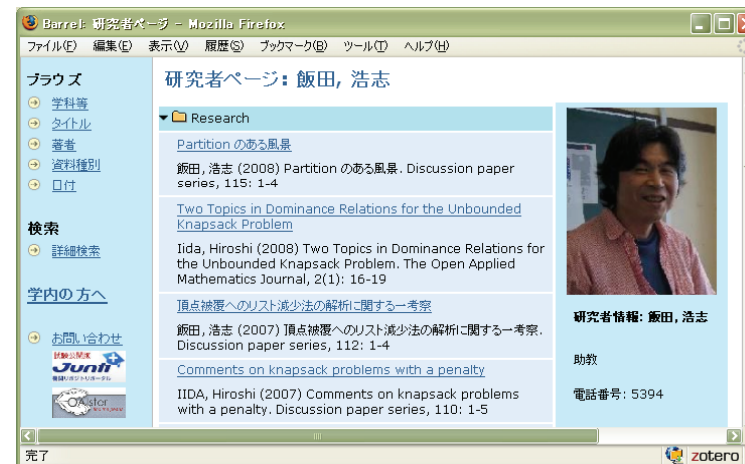
- メールの文字化け
- トップページに文言

– 小樽商大Barrel

- OCR
- タイトル変更希望
- メタデータ出力機能
- 研究者ページ →

– 静岡大SURE

- ブラウズ画面の折り畳み
- 著者がコメントできる欄



統計情報のメール通知

- 各文献のダウンロード回数を月次で提供者にメール通知

北大、樽大、筑大、北陸先端大
などで実装

共著者にも!

- 意義の実証

— 「意外なところで、あるいは反対にもっともな所で読まれていたりして、大変興味深く、かつ今後の刺激になるデータです。今後とも楽しみにしております。」

Barrelご提供文献の閲覧状況(2008年〇月)

〇〇先生
日頃より附属図書館の事業にご協力頂き.....

附属図書館では、「小樽商科大学.....(Barrel)」に著作を提供下さったみなさまへ、月1回、閲覧状況をお知らせしています。

以下は、文献ごとの閲覧回数です。より詳しい内容もご提供できますので、ご希望の方は....

※詳細版の内容はドメイン別の閲覧回数です。
.edu(米国教育機関)から何回、.otaru-uc.ac.jp(小樽商大内)から何回、といった内容になります。

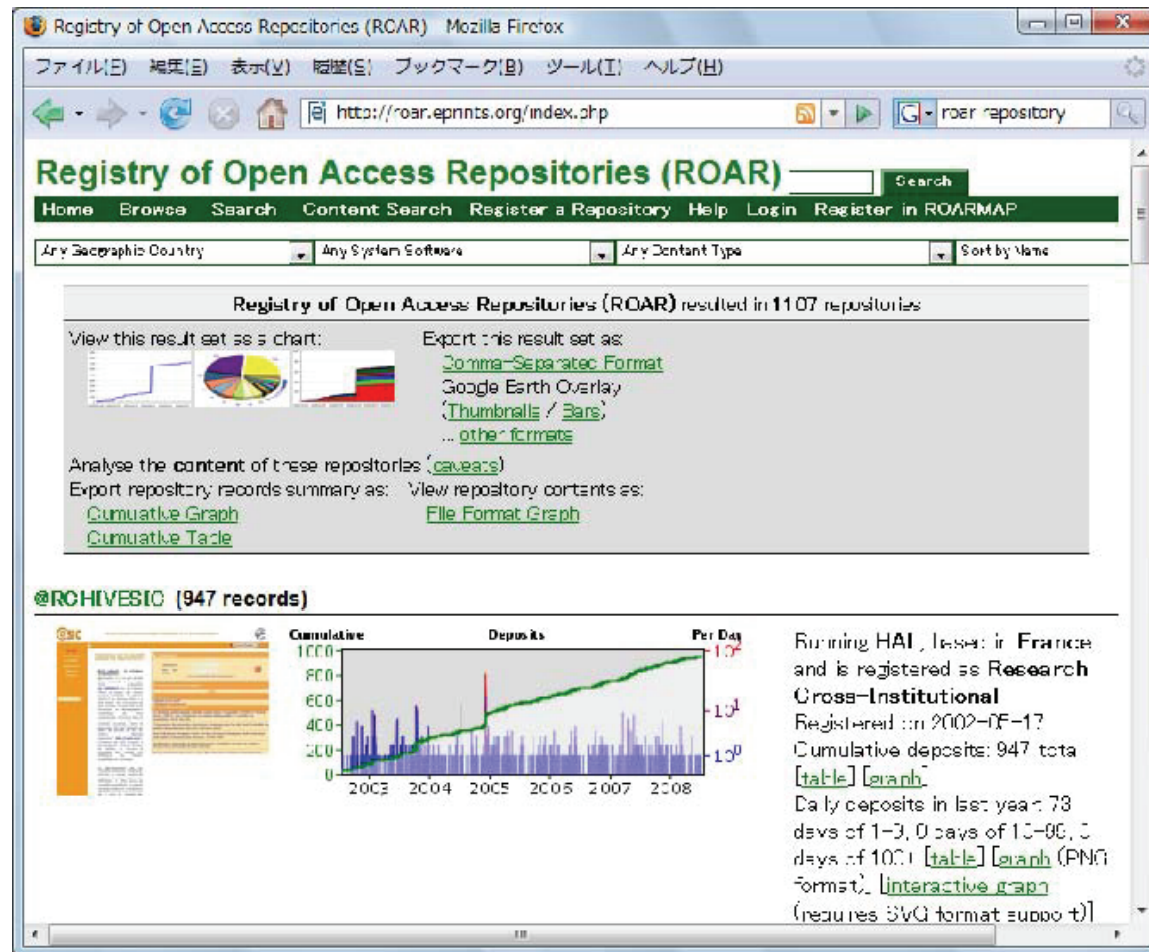
来月以降こうした通知が不用であれば.....

【2008年〇月 文献別被閲覧回数】

○ダウンロード XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
○ダウンロード XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

:

よい機関リポジトリとは？



ROAR: <http://roar.eprints.org/>

さいごに

- 学内研究者(著者)に対する図書館のサポート。
 - 教員と作り上げるもの。信頼関係を結ぶきっかけ
 - 好きになってもらえば、おのずからコンテンツは集まる
-
- 先行大学のいいところはもらいつつ、
 - 自大学に合った進め方で。しかし、
 - 図書館から飛び出て、教員と話すことが一番大切

隠れた最大のメリットは

- 図書館はこれまで専ら利用者(読者)としての教員(研究者)を相手にしてきたわけですが, IRを推進するにはどうしても発信者(著者)としての教員(研究者)と密接な関係を結ぶ必要があります。
- 図書館が中心となって機関リポジトリを推進することの図書館にとっての隠れた最大のメリットというか恩恵というか楽しみは, **発信者(著者)としての教員(研究者)と身近に接し, そこから, これまでになかった新たな図書館サービスのヒントを得られることではないか**

(<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf-ml/100/194.html>)